
カメレオンクラブにようこそ

ぼむちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメレオンクラブにようこそ

【Nコード】

N5063S

【作者名】

ぼむちゃ

【あらすじ】

大学に入学した少し抜けている遠野麗音。麗音がカメレオン・クラブなるお悩み解決クラブの会長、岡目蓮に出会い・・・
なんとなーく事件が起こり、なんとなーく解決してしまう、お話。

? Mission 1 カメレオンクラブに入会せよ

桜が人生の門出を祝うように咲き誇っている。春、それは出会いの季節である。

? Mission 1 カメレオンクラブに入会せよ

人込みは、苦手だ。東野麗音 とおのれおん は、人込みに飲まれて、どちらが目的方向なのかも分からずにため息をついた。

今日は、大学の入学式。高校を無事卒業した麗音は、四月から晴れて花の女子大生になったのだ。

入学式を終え、講堂から一步出ると、そこはお正月のバーゲンにも負けず劣らずの混み具合。一つ違うのが商品を奪い合うのではなく、新入生を各々のサークルに勧誘してくることだ。

新入生はみな一様に黒いスーツに身を包んでいるから、まるでカラスの集団だ。それを取り囲むようにチラシや連絡先を書かせる紙を持って、ぴーちくぱーちくと小うるさいインコが二重三重に押し寄せてくる。

要領のいい新入生なんかは、片手に鞆、もう片方は携帯を持つポケットに手を入れるかして、大量のチラシから逃げているが、どんくさい新入生は一度チラシを受け取ったら最後、そこにどンドン新たなチラシが積み重ねられ、最終的には、電話帳ほどの厚さになっている。

そして、そのどんくさい新入生の代表とも言つべき麗音は、着られないスーツに大量のチラシ、人込みの三重苦にへとへとになっていた。

麗音はなんとかその人込みから抜けだし、中庭のベンチに腰を下ろした。今日は、春にしては日差しが強く、麗音の喉はからからだ。近くに見える自販機に飲み物でも買おうと、鞆の中の財布を取り出そうとしたが、出てきたのは「ない」という麗音の渴いた声だけ。

思わず、頭が真っ白になる。財布にはもちろんお金、カード、そして先程交付された学生証もろもろ大事なものが入っている。

しかし、それ以上に大事なのは財布本体だ。大学生になったお祝いに母親が新品のブランド物の財布をプレゼントしてくれたのだ。

「麗音も、もう大学生。きちんと大人になった自覚を持ちなさい」

今朝、母親に言われた言葉が頭の中で反響する。早速、また、やっってしまった。

そう、また。麗音は、財布をよく失くす。

高校の時は、財布が落ちていたら、まず遠野に届けろ、というのが当たり前になったし、財布をよく失くすことに腹を立てた母親は小さい子供用の財布、首ひもの付いたガマ口財布を麗音にあてがった。

いや、また、お子様ガマ口財布に逆戻りなんて・・・

麗音は、頭を振ったり、傾けたり、回したりと、財布をどこに置いてきたか、考えるが、一項に思い出せない。

と、その時、

「もし、お嬢さん」

という爽やかな青年の声が麗音の頭上から聞こえた。

その声に、ぱっと顔を上げた麗音の目の前には、スキンヘッドにグラスサン、全身を黒スーツに身を包んだ、いかにも怪しげな男がいた。

これが、岡目蓮 おかめれん との出会いだった。

「お困りのようですね」

その身なりとは裏腹に男は、優しげに麗音に話しかけ、さりげなく隣にこそを降ろした。

麗音は、この場から立ち去りたいと思いつつも、無視したら何をされるか、という恐怖にかられ、ひきつった笑みを浮かべた。

「べ、別に困ってませんよ？」

「どうぞ」

男は、手品のように内ポケットから缶ジュースを取り出すと、両手で恭しくジュースを麗音に差し出した。その様子に麗音があっけに取られて固まっていると、

「飲んでください」

と有無も言わせない様子で、ジュースを麗音の鼻先に押し出してくる。

「じゃ、じゃあ、いただきます」

最初は戸惑ったが、麗音の喉が渴いていたのは事実。喉が潤うと、気分も落ち着きを取り戻した。

「あなた、一体」

「はじめまして。遠野麗音さん。わたくし、こう言うものです」

男は、またもや内ポケットから、名刺のような物を取り出して、麗音に差し出した。名刺のようなもの、といったのは、大きさは確かに名刺なのだが、名刺にしてはいささか色合いがカラフルすぎる。虹色なのだ。

そして、表には太い字で『岡目 蓮』、裏には・・・

「カメレオン・クラブ？」

麗音は、思わず声を出し、クラブの名前を読んだ。

カメレオン・クラブだなんて、変な名前。一体何のクラブ、と思いつつ、下を見ると、小さな字で、なぜかすべてカタカナで、『アナタノオナヤミカイケツシマス』と書いてある。

男、改め、岡目蓮は、突然立ち上がると、よく通る声で、

「あなたのお悩み、解決します」

と言って、舞台の上で役者が頭を下げるように、堂々としたお辞儀をした。

「わたくし、カメレオン・クラブの代表、岡目蓮と申します。ぜひ、カメレオン・クラブにご入会いただきたく」と口上を述べるように喋り続ける岡目蓮。

麗音も思わず立ち上がり、

「ストップ、ストップ。意味が分かりません」

と岡目蓮を制止した。

「なんで、私？」

「はい。カメレオン・クラブは、人さまのお悩みを解決するのが第一の目的。会員には、人さまのお悩みの辛さ、苦しさ、悲しみ、痛み、の分かる感受性の強い方でないといけません。見たところ、あなたさまは、ご自身がよく失敗をなされているので、その痛みを身を持って理解できる方かと。現にお財布を失くされてますし」

岡目蓮は、さりげなく麗音を馬鹿にしているようである。カチンときた麗音は、

「それは、そっちの事情でしょう。私は財布無くして困ってるの。

クラブに入っているとかそういう状況じゃないの」

と、声を荒げて反論した。

「では、いかがでしょう。もし、あなたの財布を見つけたら、カメレオンクラブにご入会いただくというのは？」

「いいわよ」

「女性に二言はありませんよね？」

「もちろん。じゃあ、そういうことで、私、紛失物センターに行きますから」

麗音は勢いよく岡目蓮に背を向けると、早足で歩きだした。が、五歩も行かないうちに、岡目蓮の声が背中に届いた。

「もし、あなたの財布これですよね？」

岡目蓮は、麗音の目の前で、内ポケットから財布を取り出した。グイトンの長財布。

「私の一！」

麗音が財布を岡目蓮から、むしり取り、小躍りでもしそうな勢いで喜んでいたが、ふっと動きを止めて岡目蓮を睨みつける。

「あんたが財布盗ったの？」

「そんな人聞きの悪い。わたくしは、財布を拾ってあげた親切な人ですよ」

そう、岡目蓮は財布に入ってる学生証で麗音の名前もしたのだから、麗音が財布を失くして困ってることも知っていた。そう考えると、岡目蓮のすべての行動にも納得がいった。

「で、ご入会の件ですが」

岡目蓮は、微笑みを絶やさずにカメレオン・クラブの説明を始めた。

それを聞きながら、麗音は、はめられた、と心の中で地団太を踏んだ。

けれど、時すでに遅し、だった。

？女の敵を捕まえる1

？女の敵を捕まえる1

「あ、そっか。犯人は、貴方だったんですね」

麗音は、目を見開き、驚いたように犯人を見つめた。

「ジリリリリリ」

目覚まし時計の音が部屋に鳴り響いた。麗音は、寝ぼけ眼で目覚まし時計に手を伸ばすが、目覚まし時計があるはずの場所がない。

いつもベッドの隣の勉強机の上に置いてあるのに。

心なしか、目覚ましの音も勉強机からではなく、真上から聞こえているように感じる。

「お姉ちゃん。もう、四度寝する気？起きる気ないなら、そんなに早くに目覚ましセットしないでよ。こっちまで、目が覚める！」

麗音の妹、眞子が目覚まし時計を片手に麗音を見下ろしながら、文句を言った。眞子は、セーラー服に身を包み、髪の毛もしっかりブローされている。

「なつかしいなあ」

眞子は、麗音の三歳年下の妹で、麗音が高校を卒業と同時に高校に入学したのだ。眞子が来ている制服は、麗音が高校時代に着ていたものだ。

「お姉ちゃん、そんなのんきなこと言っつて、大学、遅刻するんじゃないの？もう、知らないからね」

眞子は呆れたように言っつて、目覚まし時計をベッドの上に置くと、部屋を出て言っつたしまった。

「もう、眞子はせっかち」

そう麗音は言いかけて、時計に目をやると、麗音の声は悲鳴に変わった。

「遅刻する」

「そうですね。遅刻しそうになり、慌てて牛乳でトーストを流し込み、自転車で疾走、そしてこけてしまった、ということですね。素晴らしい。麗音さんは、期待を裏切らない」

冷静にそう分析する岡目蓮は、室内にもかかわらずサングラス着用、そして昨日と全く同じ服装である。

怒鳴りつけたいが、今は講義中。講義の始まる直前に何とか滑り込んだ麗音の隣に、さっと岡目蓮が気配もなく忍び寄り、隣の席に収まったのだ。

麗音は小声で言い返す。

「なんで、あなたがここにいますか！」

「なぜ？推理するまでもない。この講義を履修しているんです」

「だって、この授業は、一年生しか取れないんだよ」

岡目蓮がその問いに答えようとした時、

「そこ！おしゃべりするなら、出てきなさい」と白髪交じりの中年の教授が一括。

岡目蓮は、謝りもせず、講義室中に響き渡る声でこう言った。

「はい。では、お言葉に甘えて失礼します」と。

そして、岡目蓮は立ち上がり、有無も言わず麗音の鞆を持って立ち去った。麗音は、「ちよと」という声を飲み込んで、講義室を後にした。

「一体何なの？もう」

麗音が岡目蓮の後ろをついていくと、岡目蓮は立ち止りもせずすたすたと歩いていく。

校舎を出て、中庭を突っ切り、食堂のある方へ向かっている。

「どこ行くの？」という麗音の問いかけにも、岡目蓮は答えない。

そのくせ、すっかり麗音の荷物を掴んでいるから、引っ張っても引き話せず、荷物が人質に取られているようなものだ。

そのまま、食堂の隣にある築五十年は経っていそうな、平屋の木造建築に入っていく。薄暗い長く細い廊下を歩くと、みしみしときしむ音がした。

そして、突き当たり右の扉の前で、岡目蓮は急停止した。

「ようこそ、カメレオン・クラブに」

そこには、名刺と同じように虹色の看板に『カメレオン・クラブ』と大きく書かれていた。

中に入ると、どこかの応接間にあるような赤い革で出来た立派なソファ二つと猫足のテーブルが置いてある。床には、青が基調のペルシャ絨毯が敷き詰められ、天井では淡い光を放つシャンデリアが揺れていた。

まるで、突然時間の流れがゆったりした空間に放り込まれたようだった。

「さあ、どうぞ」

岡目蓮は、ソファの一つに麗音の荷物を置くと、もうひとつに椅子に自分が腰掛けた。

「さて、昨日は突然君をスカウトした訳だが、少し考えてみたんだ」
岡目蓮は、ほっそりとした顎に指を擦りつけながら言った。

「確かに君には資質がある。だが、しかし、それを確かめてからでないと、入会は見合わせた方がよいのではないかと」

「はい！」と麗音が元気良く返事をした。岡目蓮は驚いたようにサングラスを上には掛け直した。

そう、この岡目蓮の求めている資質がなんだか知らないが、ここで、麗音に資質がないと分かれば、この変な人から解放される、と麗音は考えたのだ。

「やる気は十分、といったところだな。そう、探偵には、やる気も重要な要素で……」

「ちよっと、まったー。探偵って？」

「おや、言っていないなかったかい？カメレオン・クラブは、優秀な探

偵を擁した探偵によるお悩み解決クラブなのだ」

岡目蓮は、自信満々に胸を張り、白い歯を見せて笑った。麗音は心の中で、いや、岡目蓮は探偵というより、どっちかというところ、やぐざとか、探偵に追われる立場だ！と叫んだ。

「ふうむ。探偵には見えないといった風だな。思い出してください。わたくしの先程の素晴らしい推理を」

岡目蓮は、ふんと得意げに鼻を鳴らし、人差し指を立て説明しはじめた。

「思い出してください、私の推理を。あなたが朝寝坊し、牛乳をトーストで流し込み、自転車でこけた、これは合っていますね」

麗音は、「う」と言って黙りこむ。確かに岡目蓮の言うとおりだ。「ストーカーですか。怖いんですけど」

と麗音が苦し紛れに文句を言ってみると、岡目蓮はやれやれと言った風に首を横に振った。

「ふ、失敬な。簡単なことですよ。まず、第一に四方八方を向いた髪の毛、これは朝寝坊してブローする時間がなかったことの証拠、そして、あなたの口の周りにうっすらとついた白ひげ、服についたパンくずから、朝食は容易に想像できます。また、そのストッキングについた黒い筋は自転車に乗った時に出来るもの、そして、少し右足をかばった歩き方からして、あなたが転んだことも分かります」

麗音が驚いて黙っていると、岡目蓮は最後のとどめに「どれもこれも初歩的なことですよ」と言い放った。

「あいにく私はそんな初歩的なことさえ分らないんです。だから、資質なんてないです。そもそも、こんなクラブ入りたくないです！」

「いや、遠慮なさらずに。物は試しにというではありませんか？」
「絶対いやです」

麗音の悲痛の叫びを無視し、岡目蓮は冷静に話を続けた。

「それはそうと、今回、あなたに解決してほしい事件は、女子寮の下着ドロです。わたくしは、残念ながら、男。いくら優秀な探偵とは言え、性別は偽れません。あ！」

岡目蓮は、突然内ポケットに手を伸ばすと、名刺大のものを取り出した。

「学生証！」

そう、それは、麗音の学生証だった。

「昨日、抜き取らせていただきました。これは、人質に取っておきます。放課後、西門の前で待ち合わせしましょう」

岡目蓮は、学生所を右手左手に手品のように移し替え、白い歯を見せて笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5063s/>

カメレオンクラブによるこそ

2011年4月17日11時55分発行